



フランスから： イミグレは外国人？それとも異邦人？

すずき
鈴木

ひろまさ
宏昌

●早稲田大学名誉教授、IDHE-ENS-Paris-Saclay 客員研究員

最近、新聞を読んでいたら、アルベール・カミュに関する記事があり、急に彼の代表作が「異邦人」であったことを思い出した。昔、私が学生だった頃、カミュの「異邦人」と「ペスト」は実存主義のサルトルの作品と並んで必読書のひとつだった。あまり「異邦人」の中身は覚えていないが、面白い題名だなと読んだ時に思った記憶がある。「邦人」という当時滅多に使われない言葉と「異」の組み合わせが面白かった。その後、大学でフランス語を勉強しているうちに、カミュの本の題名は L'étranger（見知らぬ人、外国人）という平凡な表現だったのでがっかりした記憶がある。もし、最初から、訳者が「見知らぬ人」あるいは「外国人」と直訳していたら、今日までカミュの名作は、初版のままの題で残っていただろうか？さすがに文学者（窪田啓作、1951年）の訳だと感心した。辞書で見ると、「邦」は「国」と同義語で、政治的、行政的単位の地域を指すという。確かに、今でも、在留邦人とか連邦国家などの表現は普通に使われるが、単独では邦人という言葉は使いにくい。私の感じる「邦人」には、言語、文化、歴史を共有する同国人という響きがあり、「異邦人」には、そのような文化に同化しない人、あるいは同化したくない人という響きを感じる。それに対し、「外国人」となると、無味乾燥な行政用語になるように思う。

こんな古い話からこの欄を書き始めたのは、ここ40年にわたり外国人労働者問題に関する多くの

原稿を書いてきたが、いつも心のなかでは、フランスにおいては、外国人労働者という表現は適切でなく、できれば他の表現を使いたいと思っていた。とは言え、フランスで用いられているイミグレは日本では通用しない。仕方なく、フランスの外国人労働者（イミグレ）と使うことが多かった。一般的に、イミグレは、労働を目的として流入してきた外国人労働者とその家族の集団を意味する。イミグレの多くは高度成長期に安価な労働者として流入してきた外国人（古くはイタリア人やスペイン人・ポルトガル人、1960年代以降は、アルジェリア、モロッコなどのマグレブ出身者、最近では西アフリカ諸国からが多い）で、フランスに定着し、家族を呼び寄せ、家庭を築いている。マグレブ出身者の多くは、今では、第2、あるいは第3の世代のイミグレが多くなっている。フランスで育ち、教育を受けた外国人労働者の子孫は成年に達すると自動的にフランス国籍を獲得する。このため、イミグレの4割はれっきとしたフランス人である。したがって、イミグレを外国人と訳するのは事実と反する。

ここで、イミグレと外国人の違いをフランス経済統計局（INSEE）の数字で確認しておこう。INSEEのイミグレの定義は、フランス国籍を持たず、外国で生まれ、現在フランスに滞在している人である。そのため、フランス滞在中にフランス国籍を取得した人も含まれる一方、フランスで生まれた外国人は含まれない（イミグレの2世、



3世は含まれない!)。外国人は、単純にフランス国籍を持たない人である。2018年の統計では、フランスに滞在する外国人は480万人(総人口の7.1%)であるのに対し、イミグレの人口は650万人(総人口の9.7%)となる。これに対し、イミグレの子孫は760万人と第一世代を上回るので、合計すると総人口の21%がいわゆるイミグレ人口となる。したがって、イミグレは一部地域に住む外国人集団ではなく、フランスのどんな都市にも見かけられ、フランス社会に溶け込んでいる。

では、イミグレを異邦人と訳するのはどうだろうか?イミグレの大部分は長期間フランスに滞在し、家庭を持っていて、全くフランス社会に同化している。もちろん、その一部には、フランス社会に反発し、学校教育から落ちこぼれて、非行に走ったり、イスラム・テロに加担する人もいるが、それはまったくの例外である。とすると、イミグレを異邦人と訳するのは困難である。ただし、フランス人が持つイミグレのイメージのなかには、かなりフランス社会に同化できない異邦人の集団という意味も含まれている。周知のように、フランスで近年大きな政治問題になっているのはイスラム教徒あるいはアラブ系住民のフランス社会への融合の問題だが、これはイミグレのなかで、比重の大きいマグレブ出身者の大部分がイスラム教徒であることと関連する。保守政党や極右政党が、アラブ系の住民の存在をイスラム・テロに結び付け、扇動している感じが強いが、イスラム教徒の

多くは、ラマダンやベールの着用など、フランス人の生活様式と異なるイスラム社会の伝統を維持している。イミグレの呼称には、フランスの伝統的な文化を共有しない集団という意味も含まれるので悩ましい。

このように、イミグレに対する納得できる訳語が見つからない上に、もう一つ漠然とした不安を感じながら、私は多くの原稿を書いたように思う。その不安とは、フランスの5人に1人はイミグレであるという実態を日本人に本当に理解してもらえるのだろうかという不安である。イミグレの問題はその数の膨大さとともに、大都市に集住していることにある。1つだけ驚くべき数字を示したい。パリの北に位置するサンドニ県はイミグレが多いことで有名だが、その県の18歳以下の人口の実に57%が少なくとも親の1人が外国出身者という(フランス全体では18%、2013年の統計)。サンドニ県は、フランス国内で所得水準が最も低く、雇用、住居、教育、安全面で貧困なことで知られているが、だからこそ多くのイミグレと不法入国者、不法労働者が安い住居を求めてそこに集中する。イミグレという集団の下層部には、フランス社会の様々な貧困問題が凝縮される。このように、多角的で複雑なイミグレの問題をどうしたら日本に伝えられるかと苦闘したが、正直のところ、私には解決案が見つからなかった。